

中国の社会と文化

一、商業史への関心

私はこれまで六〇年以上もの間、一貫して中国商業史に興味を持ちつづけて今日にいたりました。中国の歴史叙述は歴代の帝王政治つまり「王道」の栄枯盛衰を紀伝体の枠組みに沿い、しかも農本節儉の倫理観を基調として綴ることを本命としていますから、商業とか社会変動とかは、本流からの矛盾であるか逸脱と扱う傾きがあつて、むしろ秩序や階層や調和の持続の側面に力が注がれがちです。Fernand Braudel の名著『一五〇一―一八世紀の文明と資本主義』第二巻『商業という原動力』（一九七九）で書かれているような形で躍進的な商業の駆動力を語ることは、中国社会史については至難の業と予想されました。

ただし、私にとって巡り合わせとして二つのきっかけがありました。第一は、大学院に入学した一九五三年当時、中国経済史の開拓者であった加藤繁先生の遺稿集『支那経済史考証Ⅰ、Ⅱ巻』（一九五二、五三、東洋文庫刊）が公刊されました。同先生には、博

斯波 義信

士論文『唐宋時代に於ける金銀の研究Ⅰ、Ⅱ巻』（一九二五、二六、東洋文庫刊）、すなわち古代以来、価値尺度、大口交換の手段であった金・銀・絹のうち、絹が北宋の間に貴金属代替品としての使命を終え、代わって銀が登場してくるという歴史の流れを克明に研究した不朽の大作があり、これはいわば中国貨幣史、商業史の大筋を達観し開拓した労作です。一方、『考証』の論考は、むしろ唐宋の商業史の各論部分に立ち入って、商事制度のおこり、各種産業史、都市と市場の変化、人口動態、商事組織の要所について実証したものです。加藤先生の業績はすでに欧米、中国の学界にもかなり知られていました。もうひとつの巡り合わせは、入学した大学院が創立されたばかりの「新制」だったことです。研究科長の山本達郎先生から、「新制」は学習単位を課しているところが旧制とちがう。今の世界の学問は国際化しかつ学際化している方向だから、専門外の授業を進んで習得して考察を柔軟多岐にし、また国際学会にも加わるよう努力すべきだ、と指導され、その後もこの教訓を畢生の坐右の銘としてきました。

幸いこのころ、東大文学部の東洋史研究室で毎週か毎月開かれて

いた「歴代正史食貨志研究会」に参加させていただきました。もととは加藤先生が座長でしたが、逝去（一九四六）のあとは和田清先生が座長となられ、加藤先生の高弟の諸先生が明史、晋書、宋史などの食貨志に対して詳しい訳註を施されました。青山定雄先生の分担であった『宋史』の「和糴」の章を訳註して報告するようにと仰せつかり、諸先輩がされている、文献からの資料の検索、史料批判、読解、註のつけ方などを、先輩のお仕事を見よう見まねで習いながら、この報告をなんとか果たしまして、また同時に『明史食貨志訳註』『宋史食貨志訳註（一）』の出版（東洋文庫）のお手伝いもしました。この時の経験がその後の研究のためにどれだけ役に立ったかは計り知れないものがあります。

和糴というのは、古い時代から物価を調節するために穀物を政府が買い上げる仕組みでしたが、やがて常平倉の運用方法へと変わり、唐半ばから宋時代では、軍隊の消費する米や銅銭や資材を、政府の手で軍需補給をする兵站の制度として、大規模かつ広範に行われた財政上の重要政策でした。米や雑穀は中国では遠隔地流通の基幹商品です。宋代は地主制度が普及した時代だと当時は想定されていなかったので、農村部で農民が米を売り、米が広く商品流通の中に出回る事は予想できない理屈ですが、実際に史料を集めてみると、遠隔地流通のなかに米が盛んに出回っており、農家の庭先から直接に集荷される用例が頻出しました。そのほか、米の生産状況にしても、生産の集約と粗放、平均収量の水準の高下など、地域差、地方差が甚だまちまちなことも分かってきまして、こうした地方差を整理して解釈をつけていかないと、経済史、社会史のような一般化を求めた分野では問題が残ってしまうと実感した次第です。

農民的商品である米が流通市場に流れ出た背景としては、政府が軍需に高い関心を持ち、運輸業者（船戸、米船）をチャーターの形で雇い上げて、例えば積載量の二割ていどの私貨の搭載を認める（「二分力勝↓免税」といった有利な条件を与えながら推進する《官民合弁》のメカニズムが、運輸業者の活動を大いに助長したその効果も重要だと思われまます。さらに、河東（山西）、河北、陝西という遠くて交通不便な北辺の三路に駐在する大軍への軍需補給を円滑に運営するために、香料、塩、茶、明礬などの貴重な商品とか、送金に使う銅銭を、有利な条件で開封の都で受け取れる有価証券や為替を、この三路に納入する商人に向けて発行したことも、穀物が広い地域にわたって大量に流通できた背後事情を説明していると思われまます。唐の七四九年に農民兵士の根幹を成してきた府兵制度が崩れ、有給の傭兵を以て軍隊の主力を構成する制度が採用されますが、秦漢以来、《農本抑商》を国是と掲げて、商業は社会の必要悪だとみなしてきた政府が、一転して運輸業者を《官民合弁》のメカニズムに組み込み、遠隔地商人を市場性の高い商品で誘う兵站事業にくみ入れたことは、商業を必要善として宥和的に対処する姿勢が政府の側に生まれてきた証左であろうと考えられます。

それにしても、この政策転換を導いた究極の動因は、交通とくに水運の改善に尽きると思われます。中国の国土は広大ですが、どの時代にも、これこそが「中華」であり「華夏」であり「中原」であるといわれている、政治、文化、経済、資源を運営するための核心地域としての「小中国 *ecumenon*」があつて、大中国の重心部分 *center of gravity* だと目されてきました。古くは黄河流域の関中、山東、河南がそれを代表してきましたが、隋の煬帝が命じて大運河を開鑿

したことをきっかけとして、「華夏」の重心域は南方の「江南」な
 いしは「東南」(華中、華南)へと移り、以後、(南高北低)の勢いは
 ますます進む一方で清末に至りました。大運河は随所に水位の落差
 が多くて、これを水門や井堰を設けて通過する仕組みを採用してい
 ます。一般河川でも、水門を盛んに用いましたが、河川の部分部分
 において水位に適した船を専業とする水運業が起り、結局、華中、
 華南の低地では、文字通り四通八達した水運によって、地方、地域
 の交通による統合が唐宋以後に促進されました。この、交通の発達
 が唐宋変革の重要な引き金であったという洞察は、すでに大先輩の
 桑原鷗藏先生(一八七〇〜一九三二)が『歴史上より観たる南北支那』
 (一九二五)のなかで提起しておられ、加藤先生、宮崎市定先生も
 この解釈路線を継承発展させておられます。経済学の言葉でいえば、
 これは社会変化の原動力としての「社会分業 social division of labor,
 Smithian (A. Smith's) dynamics」のおこりを指摘していることになり
 ます。交通の改良によって広大な空間が開けてくると、それぞれの
 地方はその資源の分布と利用を、市場に対する立地条件の優劣長短
 で比較して、専業化による有利さを計算し、資源の特産化、特化を
 試みる方向にすすむ道理です(特産物市場の形成)。結局、唐宋の
 変革を起動させた駆動力は、交通の技術改良がその基底にあり、合
 わせて兵站を大規模かつ効率的に充足させるために、政府が交通、
 交通業者、商人、商業一般に対して有和した態度で臨むようになった
 ことが、変革の因果関連の筋道として指摘できると思われれます。

二、商業と〈都市化〉

「社会分業」という切り口を参考にしながら、宋代の遠隔地流通で
 登場した商品について史料を探していたころ、宋代において際立っ
 ている都市の発達、それと同時に農村部一帯に一斉に叢生してきた
 農村の市や半都市というべき鎮の成立にも興味をもちました。とり
 あえず史料の多い江南地域について多発していた農村の市場と祭
 市・大市の史料を集め、データから帰納できる事実関係を『東洋学
 報』に発表しました。私は当時東洋文庫の研究生でしたが、たまた
 まロンドン大学の教授のデニス・トウイチェット博士が東洋文庫に
 滞在しておられましたので、コメントをお願いしました。先生は大
 著『唐代の財政』(一九六三)において、加藤先生の考証の論点を
 継承しながら、唐代から宋代にかけての社会経済的な大変化を表
 明する現象として、秦漢から唐初までの都市制度を律してきた「官
 市」の制度の弛緩がある、と洞察されました。すなわち行政都市内
 の居住区画は古来、治安と防禦に重点をおいて施設され、整然たる
 基盤目状のレイアウトに従い、城周の門と門を結ぶ街路に沿った牆
 壁によって居住ブロック(里ないし坊)がすべて囲われ(條坊制)、
 街路への出入はブロックの四周の門に限定され、街路に門を構える
 ことは高官以外は禁止されていました。市場は政府の監督下におか
 れ(官市)、設置場所も特定のブロックの一または二を指定し、商
 工業者は官市内の市籍に登録され、同業ごとに店を並べ、官市に駐
 在する役人に監督され、営業時間、度量衡、価格の統制を受け、重
 税を課され、外征の時には徴発の対象(七科の謫)にもなった。等
 等の厳格な統制は、唐半ば以後宋初にかけて、都市の自然発達の結
 果として崩壊してしまい、都市内の居住制限及びブロックの制度は
 なくなり、商工業者は目抜き場の場所に店舗を開き、営業時間

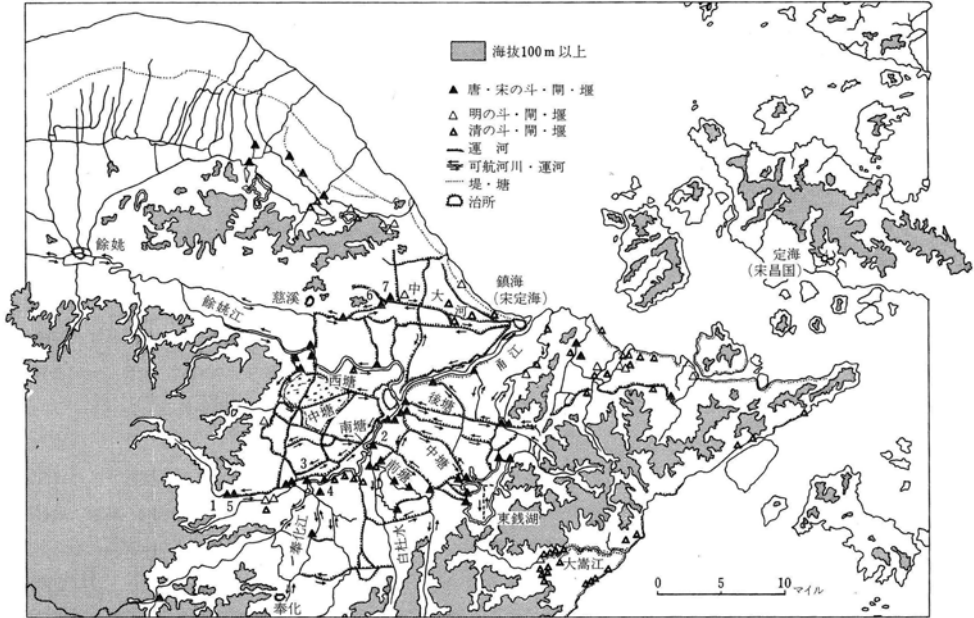
も夜間を含めて自由となり、同業者が自発的に結束して組合(行)を結成して相互の利益を守り又福祉・娯楽の行事を催すようになった、とされました。同時に、これも加藤説を承け、唐宋時代になると、縣城、府州城などの行政都市以外にも、交通の輻輳する道路沿い、行政都市の門外、商業の要地、人口密集地などに「市」「店」「歩(埠)」「鎮」などと呼ばれる「粗末な市」草市」が多数発生したことに注目し、トウイチェット先生はここに、旧来の首都から縣城に至る系列の行政都市の階層秩序のほかに、自然的・経済的生活に即した「市」「鎮」という経済都市の階層系列が並び立つようになり、民衆の日常生活の面からみて、都市との関わり方が、行政系列と経済系列との二様の選択肢の下に立つことになった、という新しい重要な局面を指摘されました。

トウイチェット先生は私の宋代江南の市場研究に興味を示して下さり、ちょうど米国で《中華帝国後期の都市》をめぐる国際シンポジウムが計画されていて、その組織者は四川省の成都盆地に広がる「場市」と呼ばれる農村の市場町の分布を克明に実態調査して《市場地共同体》marketing community》というモデルを構想したスタンフォード大学の地理学的人類学の専門家である、ウイリアム・スキナー教授である。彼に紹介するから文通をして一九六八年に予定されている国際シンポジウムに参加してみようか、と教示していただきました。私は山本先生から勧められていた国際会議への参加の機会が、こんなに早く訪れるとは思っていませんでしたが、又とない絶好の学習の機会だと感じましたので、スキナー先生と文通をはじめました。

スキナー先生は中国学の文献学にも造詣の深い方でした。この頃

は、中国の社会構造は、欧米人学者が一般に予想していた以上に複雑であり、多岐でもあることに興味を持っていて、たとえば都市vs農村、大伝統vs小伝統といった二分法モデル(R. Redfieldなど)は単純概括に過ぎる、として、むしろ全国システム、地域システム、地方システムの三分法による観察がふさわしいのではないか、という構想をもち、地域すなわちregionに焦点を合わせて、地域の組織regional systems analysisを今後は推進したい、という研究方向でした。先生から最初に質問のあったのは、中国の唐宋以後の都市化、都市システムを通史的に調べるとすれば、どの地域を取り上げたらよいかについて、でした。地方志が揃って充実して残っている地域として考えれば、江南あるいは広東デルタなども候補だとは思いましたが、結局、寧波・紹興を合わせた亜地域sub-regionになりました。

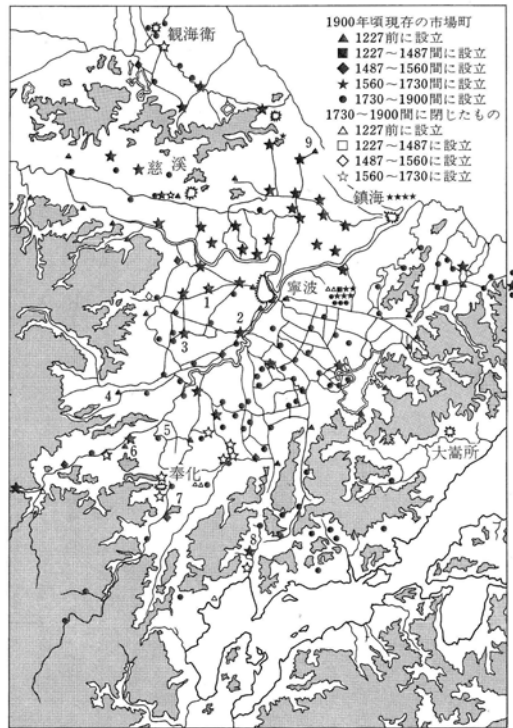
一九三五年刊『民国鄞縣通志』には、詳しい民俗誌並みの悉皆調査とそれに対応する参照のための実測地図が備わっていて、何炳棣教授も『中国人口論』(一九六七)のなかで、頼るべき地方志のひとつとして触れていたことも参考しました。スキナー先生の立場は、都市と周辺農村部を一括して考察の対象にして、地域システムの中の結節としての都市の機能を総合的に検討するという、生態環境を重んずる着眼の方向でした。この点、伝記史料や民俗誌の記述が余り利用できない中国地域社会の実態の復元は、なかなか難しい所があると思います。結局、私の報告は「寧波とその後背地」と題するもので、唐宋期における湿地開発、浙東河による海運と連絡する江南の外港としての寧波港市という集散港その商業システムの登場、都市網と周辺市鎮の発達、集散港機能という特殊な立地が生み出した



寧波の水利図（唐・宋時代）

この会議はほぼ同時に行われた三つの関連する中国都市会議（他は共産党中国の都市、近現代交際の中国都市）のひとつで、歴史上の都市に光りを当てた会議です。報告は「三本、それぞれの専門は歴史（A. Wright〈宇宙論〉、F. Motte〈明代南京〉、J. Watt〈行政〉）、斯波〈都市と後背地〉、M. Elvin〈上海：水路と市場〉、T. Gimm〈書

造船業、金属・木材加工業、薬剤の集散、金融業の発達という蓄積に立って、後年に長江デルタが躍進をとげて、上海が条約港、外洋船舶港として登場し、長く江南の首府級都市であった蘇州・杭州の地位が急遽上海にシフトしますが、寧波、紹興の人材は一挙に上海に移動して三江幫上海財閥の中枢を形成するにいたる過程を記述しました。



1900年寧波の縣・市・鎮分布

院と都市)、『P. Golas (清代ギルド)』、地理(章生道(形状論))、人類学/社会学 W. Skinner (導論: 歴史、地域の都市化、都鄙関係、都鄙システム、社会構造)、『H. Lamley (台北の形成)』、H. Baker (都市と血縁団体)、『S. Feuchtwang (都市における官祠と民祠)』、S. v. d. Sprengel, 法制『D. Deglopper (鹿港の社会構造)』、人類学 K. Schipper (台南の土地公会組織) から成り、第一部: 歴史上の都市、第二部: 空間上の都市、第三部: 社会システムとしての都市、に分別され、各部の論点の総合、理論整理は W. Skinner 教授自身が論文にまとめました。さらに、学際討論を深めるために、討論者として楊聯昇(中国学)、『E. Vogel (同)』、『Ch. Tilly (社会学)』、『G. Rozman (社会学)』、『J.B. Tauber (人口学)』、『J.W. Hall (国際比較)』、『張光直 (考古学)』という錚錚たる各専門家が招かれて会議の討論に参加しました。全体として、米国の人類学は現地調査による学問地平の開拓に力を注ぐと同時に、理論モデル、セオリーの構築に関心があると聞き及んでいましたが、この会議でスキナー教授が重んじていた観点は、先にも触れましたが、〈空間システム、社会システムとしての都市〉という側面に脚光を浴びせると言う方向でして、当時の日本における都市研究の趨勢が、おおむね近代化論に沿った整理や分析に集中していたように記憶していますが、この国際・学際会議から受けた新鮮な刺激や新知識は計り知れないものがありました。たとえば、宋代の特筆すべき現象としての、都市の発達、農村部における市場集落の叢生の問題は、別々の現象というよりは、ともに〈都市化 urbanization〉の一環として相互関連的に取り上げられるべき社会変化であることも見えてきました。

日本では〈都市化〉というとき、もっぱら社会の近代産業化に随

伴する都市変化であると考えたが、農村部で非農業的な景観や活動が目立つてくる状況を以て〈都市化〉と表現することは、歴史学、経済学、社会学何れの学術論文でも一向に問題ではなく、むしろ常態であることは、この時に気がついた次第です。

この都市化を考えるときに、首都からはじまって自然的大地域の首府、行政地域の首府、以下、大都市、中都市、地方都市とランクサイズが下り、行政上の命名法では首都(京師)、王朝分裂時期の各首府、道(路、行省、省)の首府、府、州、縣の治所という階層順位に従って名称が与えられて清末に及んでいます。中国の文献上でも、知識人の観念としても、縣城こそが行政階層上の都市の最上位に位する、名実ともに伴う〈城市||都市〉である、とする牢固とした判断が偏在しています。しかしトウイチェット先生がすでに指摘されたように、中国の都市は歴史的に見て、唐宋の変革を境にして、行政系列の階層上下の秩序と、自然的・経済的系列の階層上下の秩序とは乖離に向かいつつ今日に及んでいます。とくに、縣城は地方都市数の過半を占め、また乖離と分離はなканずく縣城以下で生じているというのが実情ですから、中国社会の都市化を展望するときは、両系列の都市化をマトリックス図の視野に収めなければなりません。スキナー先生は地理学の用語を使って、歴史用語ではなく、「中心地」という中立の用語で行政、経済両系列の階層上の都市集落の分布と階層関係を検討することを提唱しました。社会学者の G. Rozman 教授は、この方式によって古代から明清にいたる中国社会の都市化の通時的な変化を図表にまとめています。宋代から中国社会の都市化の構造が大きく変化したことはこの図表で一目瞭然です。

19世紀中国全土の都市化の二系列：行政的系列と自然的系列

表1：19世紀末、中国19省の中心地（Central Places）階層

A：集落のレベル	B：機能	C：名称	D：数	E：単位当り標準人口
1	行政中心地（上級都市） Central Metropolis	都城（京城）+省城、 道治	6：都城1、省城3、道治2	c. 1,000,000
2	行政中心地（上級都市） Regional Metropolis	省城 ^a	20：省城15、道治1、府治3	c. 200,000～ 600,000
3	行政中心地（上級都市） Regional City	道治 ^b 、府治+省城、 直隸州治 ^c	63：省城1、道治26、府治 等20、府治8、鎮8	c. 30,000～ 70,000
4	行政中心地（下級都市） Greater City	府治 ^d 、直隸州治、 直隸府治 ^e	200：道治19、府治等77、 県治等85、鎮19	c. 10,000～ 30,000
5	行政中心地（下級都市） Local City	縣治 ^f 、州治 ^g 、 庁治 ^h	669：縣治494、道治12、 府治62、鎮101	c. 3,000～ 10,000
6	非行政中心地（市場集落） Intermediate Marketing Town +小規模・辺域の県治、府治	鎮 +小規模の縣治、 府治 (主に雲南・貴州)	10,300：鎮9,626、縣治687、 府治17	c. 3,000～ 5,000
7	非行政中心地（市場集落） Standard Marketing Town	市、集、会、場 etc.	c. 25,000～30,000	c. 500～ 3,000
8	非行政集落（村落） Village	村莊	c. 800,000	c. 150～250

※ a 清末の中国本土は19省から成る。 b 同じく全て77道。 c 同じく全て68直隸州。
d 同じく全て179府。 e 同じく全て27直隸庁。 f 同じく全て1,156県。 g 同じく全て139州。
h 同じく全て58直隸庁。

※※中心地とは、行政的・非行政（経済）的な機能の中枢性の程度において、上位 / 下位レベルの集落と支配 / 統属に立つ集落のことであり、半都市を含む農業社会の都市化の考察に有用である。定期市のない孤立村落は中心地階層には含まれない。

都市化の通時的変化

表2：中心地階層の時代的变化

レベル	太古	帝国初期	帝国中期	帝国後期
	殷周～戦国	秦漢～南北朝	中唐～宋元明	明末～清末
中心地1		×	×	×
中心地2	×	×	×	×
中心地3		×	×	×
中心地4		×	×	×
中心地5		×	×	×
中心地6			×	×
中心地7			×	×
村8		×	×	×

※ 村は市の無い村落。中心地ではない。

たとえば、北宋の一〇八〇年（神宗元豊三年）に編まれた『元豊九域志』によれば、この時全国で縣城は一一三五存在しました。時に同書に載った半都市と言うべき（鎮）は一八五一存在しましたから、一縣城当たり一・六鎮です。当時は、平均して六縣で一府州を構成しますから、一府州当たり一〇程度の鎮が存在した勘定です。ほぼ同時期の一〇七七年（元豊一〇年）に編まれた『宋会要輯稿・食貨門・商稅雜錄』に記載された、全国で商稅課徵額を割り当てられていた商稅務（縣城）商稅場（鎮または市）の全國總數は二〇三四ですが、縣城であるのに商稅の割り当てが無い縣城は一一五縣、鎮でありながら商稅の割り当てが無いもの一〇一九鎮、鎮であつて商稅場に指定されたものは六〇〇です。『元豊九域志』と『宋会要』それぞれにおいて鎮の定義や記載上の基準が若干違つたので、注意しなければなりません。一般に地方都市の代表格と觀念されてきた縣城の地位が、新興の鎮ないし市に対して相対的に曖昧化しており、チャレンジを受けていた事はほぼ明らかです。また縣城からその境界に向けて進めば、数キロごとに市場のある村があり、一五キロぐらゐり行けば、やや大きな交通集落ないしは宿場に出会う形で市場集落が分布していたと想定できます。宋代では、徒歩、船、牛馬の一日の走行距離は三〇キロぐらゐりで、その半道で休憩するのが普通であつたようです。こうした状態は *rural-urban continuum* 都鄙連続型と言つる集落分布の形に相当すると思われまふ。

三、地域システムの問題

商業史の実証を進めていくと、地域偏差、地方偏差が相当に複雑

多岐であることに直面したことは、先に述べましたが、この國際會議のあと、スキナー先生は地域システム論を發展させて、全中国は唐宋以後、およそ八ないし九個のマクロ・リジョン＝大地域の總体として捉えられる。地域觀念の基底は *drainage basin*、つまり各水系の排水盆地であつて、中国人の日常の定住、生産、交換活動の基本立地が、大小の排水盆地を抛り所としている事に由来する。大地域の境界は水系が山地の分水嶺を跨ぐ箇所に生ずる一方、各大地域盆地は中枢部に生産、交換、人口定住のコア部分を備えて地域規模の凝集力・求心力の核をなしている、という *regional systems analysis* 論を提唱しました。これは、今後に各大地域ごとに比較計量に資するデータが整理されてくれば、中国社会内部における大地域相互間の比較が可能になって来る一方で、欧米、日本など他世界における同様な社会規模の地域或いは国単位と、中国社会又は大地域との計量的な通社会間比較も可能になる、という、比較考察のための合理的な枠組みを提案するものでして、中国社会の研究については、すでに研究者によつて使われ、有効であると認められつつあります。

欧米における社会文化の發展の軌跡を参考にして中国の社会文化の軌跡に解釈を施そうとするとき、これまで最も等閑に付されてきた分野は、社会の有様ではないかと思われまふ。社会のまとまり方 (*integration*) を見るにしても、物質的資源の自然的な分布状況、運輸を利用したその活用・動員の状況、地域、地方ごとの *specialization* (特産化)、市場状況、これら要因の改善や進歩は *social division of labor* 社会分業の進化として捉えられるべき現象です。唐宋時代にはこうした分業の一段の發展があつて、遠隔地商業の隆盛の土台となりました。自然資源の *specialization* と並んで注目できるのは、人材

の外に輸出という局面です。その最大かつ目立つ事例は、科挙階梯による官吏への登用にむかう出世のルートでして、すでに内藤湖南、宮崎市定の両先生が早い時期から洞察をされ、宋代の官界では新人官僚の採用が進んで、旧来のように貴族門閥層が世襲的に政府の要職を独占する体制が払拭されたこと、また科挙試験（儒業）が一部賤民、三代商人の家を除けば、広く庶民に公開されていたので、庶民の立身出世のための正規のコースと目されて、社会を広く流動化させる動因となった事を指摘されました。

出世、栄達は、没落、転職、副業、移住、出稼ぎと並んで、社会学では《社会移動 social mobility, mobility》と規定されます。出世の道を案出することは《移動戦略 mobility strategy》といえます。儒業ルートに専心することは、家庭の資産状況の好悪や、一族・郷里に学校、図書館、良師が得られるか否かによって左右されると思われませんが、各地域、地方が儒業に適した人材を養成し育成して、適材を選抜し外地に向けて送り出して学位の階梯を上昇した末に、京師あるいは路（省）、府州、縣にいたる官僚世界において栄達させようと勤めたことは、宋、明、清代を通じて明かな事実です。これはいわば物質的な特産化と並ぶ、人材の特産化であるともいえます。

何炳棣教授は、科挙制度が社会移動に及ぼした影響を一四一二、一四五七、一四七二、一四九六、一五二一、一五四四、一五六八、一五八〇、一五八六、一六一〇、一八二二、一八二九、一八三三、一八四四、一八五九、一八六八、一八七六、一八八六、一八九五、一九〇四年度の進士合格者の統計によって考察し、全土の各地域、地方に生じた人口当たりの社会移動率の長期変動の趨勢について分析しています（何…一九六二、二三七〜二四四頁）。これによると、

一七〇二年に各省の進士及第者に定額を設ける以前の明清兩代を通じて、文化的、学術的に発達を遂げていたと目される江蘇、江西、浙江、福建という中国の「東南」部の数省内の府州から出身した成功者が、上記の統計で得られる五万人を越す受験者の中でも上位の二〇傑の中に入っている、と指摘しています。私もかつて宋代商業史の史料を集めているときに、社会分業にしても、社会移動とその戦略にしても、福建人の活動に時代を代表するような事例にしばしば出会ったことがあります。この報告を締めくくるに当たり、めばしい事例をここに紹介したいと存じます。

唐宋変革を駆動させた商業の拡大、発展、そして社会の流動化を端的に示すとすれば、その最適の事例は、福建出身の学者、官僚、商業者、僧侶、道士の活動に求めることができると思われれます。唐代までの福建地域は、東を海洋で遮られ、北方から西南の辺には武夷山脈が連らなり、隣の浙江、広東、広西江西、安徽と隔絶していて、ために長い間、中原の人士の目では島嶼として孤絶した地方かと疑われていました。唐代に広東に海運が興り、钱塘江上流から建州への陸道が開け、七二八年に江西の南の難所であった大庾嶺が開通し、南唐王国が福建までを領有するなどして、江南と東南部がむすばれ、唐末の内乱を機会として人口の大移住が生じて、福建・広東地域の人口を劇的に充足しました。宋代の福建はすでに全国でも有数な人口過密の地として知られ、開拓すべき土地が極端に不足する地域でした。華中からの移住者が一族郎党、家畜を率いて来住したことは「反淮南」という言葉で示され、南宋半ばの宋金戦争の時にも再度繰り返されました。開発できる土地は乏しいので、福建人は当初から域外の広西、さらに境外のヴェトナムへと植民しました。欽州で

「射耕人」と呼ばれた福建人は荒地を開拓する仕事を専業とする開発請負（射）業者でして、広東の梅州や南恩州にもこの種の福建人が入植しました。こうした勢いは後の明清時代でも江西や湖南省への大量の入植でも見られ、また東南アジア華僑のなかでも、ヴェトナム、タイ、マレーシア、フィリピンに向かった華僑の主勢力はほぼ福建出身から成っていたことでも示されています。

農業による開発、家計の安定が望めないために、福建人が目指す社会移動の戦略は多岐にわたるようになりました。若年を福建南劍州の尤溪縣で育った朱熹は「福建の山川は奇秀である。……故に書物を背負つて上京して進士科を受験する者の数は、いつも全国の受験者の半数に上る。郷里では家ごとに学校を設け、人ごとに詩経や尚書の恩恵に与っている。出仕して政府に勤める者は、侍従の職に栄進するか天子を補佐する重臣となるし、地方官を務めても大規模で重要な州や府の知事に任じる。武官となつて要衝の地に任ずる者のなかでも、凡そその半数を（福建人が）占めている。近年世間では、役人の世界でも文化人の世界でも、その成功者はほとんどが福建出身者が占めている、といわれるくらいだ」。南宋の乾道の進士で、饒州樂安の人曾丰の『縁督集』巻一七には、福建人の外地への進出の成功、その独特の気風を説明して、「今や、農業から転じて士人、道教、仏教の僧侶、伎藝人になる者が多数いるなかで、福建だけが特別に多い。福建は土地が偏り、生計を立てることがむずかしいので、外地に移住する者が多い。至る所の学校には福建人の学者がいるし、仏教、道教の寺院には福建人の僧侶がおり、至るところの都市には福建人の伎藝人（手工業者、倉庫業者、医師、俳優、占卜業者など、一芸、一業に熟達した専門家）がいる。外地に出稼ぎする

者は日々に増えていくのに、郷里に留まっている者の数は一向に減らない。いったい、（競合する）人の数が少なければ（当然）、出世する機会はあるが、多ければ難しい。競争者が少なく、楽な道を求めれば相応な収入が得られて自活していける。競争者が多くて成功が難しい場合には、他人よりもよほど長所がなければ、成功は難しい。故に、全国を見渡して、有名な士人、道教・仏教の住持、伎芸人を較べたとき、福建人だけが技量がすぐれているのがわかる。その理由は、競争者が多くかつ成功率が難しい中で競っているからだ。競争者が多いなかでは、楽な部門で競わずに、難しい部門で競う。概していえば、熟達を武器にして競って成功する者はいない。だが名人として競争をして失敗する者はいない。故に、福建人であつて伎藝人となる者は、権門や大きな店に招かれて営業をし、道教や仏教の僧侶となる者は有名な寺院でその地位を占めて、それぞれが成功しているのだ」と述べて、福建人には熟慮を重ねた移動戦略で努力をする志向性があつて、それがこの地域をして成功者を輩出させる独自の気風を生み出している、と指摘しています。

福建以外でも、浙江の紹興府出身者は、明清時代では「紹興師爺」すなわち州や縣の知事が常設する私設の秘書を多数に輩出したり、中央政府の戸部の役人や胥吏のポストを独り占めしていたことで知られています（何…一九六二、二三六、二四七、二五三頁）。このように、儒業すなわち、生員、挙人、進士、三段階の学位の取得をめざして精進することは、生家の栄達、郷里の榮譽や利益をもたらすし、本人も富貴に上昇できるために、最も正規の出世ルートと広くみとめられているのですが、本人の資質如何、長期の努力を支える資産、途中での失敗のリスクもあるので、この階梯を追求すること

はおのずから少数の人材に限られてきます。そこで儒業に肩を並べる次善、三善の努力目標が同時に考慮されてくる次第です。衢州信安の人袁采は、『袁氏世範』において、士大夫の子弟への家訓として「士」の家の子弟で、家に相続できる俸禄や頼りになる資産がない場合、まず儒学を学ぶのが正統な道だ。才能が優れて科挙の受験を目指せるなら、家を富貴にする。それほどの才能がなくても、家塾で教えれば、授業料で暮らすことができる。受験が無理だとしても、代書の収入で稼ぎ、家庭教師（館客、館賓）として収入が得られる。もし儒業の学問が無理ならば、占い師、医師、僧侶、道士、農業、商業、工人となつて生計を立てれば、先祖の名を辱めなくて済む」として、士大夫から商工業者にいたる幅広い職業の選択肢を具体的に挙げて、何らかの職業に就いて家名を揚げることを勧めています。ここに挙げられた職業は、『縁督集』に出てくる「伎藝」にほぼ該当すると思います。伎藝とは、職業を指すというより、芸能を含めて一藝一能に秀でた專業者 expertise のことに言及している宋代の用語です。似たような言い回しとして「経紀」があつて「筋道をつける」、「世話をする」、「幹運」へマネージする」の意味で使われ、『武林旧時』という杭州の繁華を記録した書に、杭州には存在し、他所にはない経紀一七七を列挙していて、「その一部は、一事ごとに率ね数人のみ、専藉して以て衣食の地となす、皆、他所には無き所なり」と註記しています。

福建は茶、砂糖、柑橘・龍眼・荔枝、藍澱、糯米、麻布、葛布、紗綾、魚苗（養魚池用の稚魚、紙劄、書籍、陶磁（晋江、安溪、建州窯）、砂鉄（生鉄）、造船、茶具、などが、全国に市場を広げる商品として特産化していて、福建商人はこれらを陸路、海路を通じて江南、華

中、華北、南海に輸出していましたが、なかんずく、蘇軾が「福建一路、海商をもつて業となす」（東坡全集卷五六論高麗進奏状）と表現したように、海運業による遠隔地商業は、福建が專業として誇る代表格の商業でした。朱熹の弟子のひとり包恢は、福建や広東から密輸される銅銭の量の多さに対する対策のなかで、興味深いことを述べています。「海上の民（漁業者）の中層、下層の連中は、大規模に密輸出する力はなくても、寄託の形で密輸出があつて、大抵の人はこれに気がついていない。つまり、海運業者（海商）は彼等の同郷人であるか面識のある知人であつて、漁業者とは昵懇の間柄である。いわゆる寄託密輸出とは、すなわち銭を海運業者の船に「附塔（塔）」して互いに結託し、南海の貨物を買入れ帰港する。少ないときは銅銭一〇貫、ときには一〇〇貫を寄託し、常にその数倍の値打ちの貨物を手に入れる。民はただ儲けのことばかり考えていて、この手口を使わない者はいない」（敝帚稿略卷一禁銅錢申省状）。ここに「附塔」というのは、商人が合股を組んで貿易船に便乗し、正規に登録して帰港後に利益を分ける商売の術語ですが、この記録では漁業者が血縁、同郷、面識の縁故を頼りとして、海運業者ないしは船員に対して匿名出資する形の寄託貿易を指しています。海運で賑わった福建地域ことにその沿岸部では、貿易で潤っていたのは專業の海運業者だけでなく、彼等の郷里のさまざまな社会組織ぐるみの広がりがあつたことを、この証言から裏付けることができます。海上貿易を主体とする福建の発展は、明代の海禁政策、宝鈔の強制行使、明末清初の三藩の乱、遷海令、広東市港への西洋貿易の制限等の逆風に妨げられて、宋元時代のような活力を発揮できなくなりました。